

# ドストエフスキイにおけるニヒリズムの問題（Ⅱ）

——『白痴』を中心に——

清\* 水 孝 純

## 一 虚無の空間における確実なもの

虚無の空間に宙吊りの状態のまま人間は存在することはできない。その不安をかつてパスカルは「これら無限の宇宙の永遠の沈黙は私を畏怖させる」<sup>(1)</sup>と評した。その不安のなかで人間は神がありやなきやの賭けをせざるを得ない。なぜならわれわれはすでに出発してしまっているからだ。もし神への信仰を失ってしまったものがいるとして、しかし彼もまた何かに賭けざるを得ないだろう。ここにおいて人間はかれにとって最も確実と思われるものに自己を託す

ことになるだろう。最も確實なものとは最も神の属性に近いものということになるだろう。それは究極的には物質的なものではない。パスカルはまた人間にとっての死についてこう述べている。「他の場面がいかに美しいものであれ、喜劇の最後の場面は血なまぐさい。頭のうえに土が投げこまれ、それで永遠におわりだ」<sup>(2)</sup>。死は如何なる人間であれ、またいかなる状況であれ、人間は絶対的孤独のうちにそれを受け止めるしかないものである以上、その孤独を物質的なものがささえるわけにはいかない。いかに富豪といえども死の瞬間においては、貧困のうちに窮死するものと、それを迎える孤独性においてはかわらない。昔時の君主は殉死によって死を共有しようとした。笑うべきことだ。いかに殉死によって死を共有しようとしても死をむかえるときは絶対的孤独のうちにむかえねばならない。結局殉死とても生者の空しい気休めに過ぎまい。なぜ死をわれわれは孤独のうちに迎えねばならないか。人間にとって死だけが絶対だからだ。自意識という人間にとって唯一の絶対的なものの、現実的な絶対との接点が死だからだ。自意識は死という絶対の前に裸形で立たされて、この生れて始めての謎の前であってそれまでの物質的所有の無力を知る。こうして虚無の空間に宙吊りになっている意識は確實なものとして物質的なものを求めることはしないだろう。なんらかのかたちで神の属性にもっとも近似するものを本能的に求めるようになるだろう。こうしてうかびあがってくるのが、自己を神にするということだ。これは自己意識の絶対性から出てくるもっとも自然な帰結といえるだろう。ドストエフスキイの文学において、その試みは『悪霊』のキリーロフにおいて最大の表現をえるが、ラスコーリニコフこそその最初の表現であったといえる。自己の意識の絶対性をシーザー、あるいはナポレオンに擬すること、ラスコーリニ

コフの犯罪はまさに権力者のもつ人間支配の意識に自己を高めようとする試みにほかならなかった。この場合ラスコーニコフにとって具体的にナポレオンになることが目的ではない。彼にとって問題は意識のレベルなのであって、意識においてナポレオンの意識をもちさえすればよいのだ。なぜかといえば、彼の意識は具体的な権力を目指すには、あまりにも性急だからだ。彼の犯罪は一つの賭けだ。賭けにおいて重要なことは勝つか負けるか、二つに一つという結論しかない。そこには妥協はない。賭けられているものは権力意志であり、人間はいわば勝ち組と負け組みの二通りに分類される。この妥協のないという点に賭けの特徴がある。なぜなら具体的な権力の獲得には、常になんらかの形での妥協を伴わざるをえない。それが現実的な行為である以上、とにかく時間のなかで獲得に向けて、人間と人間とを結びつける煩雑な仕事をこなしてゆかねばならない。このような不断に権力の獲得にむけての行為においては妥協が生れてこざるを得ない。そこで手段と目的が転倒し、手段が目的の座を奪う。しかももしその過程において挫折したならば、彼の其れまでの行為の意味は一挙に無化されてしまうだろう。絶対を求める性急な精神はそのような目的と手段の逆転を拒否するだろう。賭けは時間を撥無することによって、そのような逆転を許さない。目的は純粹なままに提起される。

ある選ばれた人間は人を殺す権利を有するという論理のもとに、自分がその選ばれた人間であるかどうかを試す、それがラスコーニコフの賭けであった。ここで賭けられているのは社会的制裁を超えた自己の絶対性の確認というものだった。彼は自白し、シベリア流刑になる。しかし彼はシベリアにおいて自分の論理のなかにいささかの誤りを

も見出さなかった。彼は彼の論理を持ちこたえられなかった点にだけ、過ちを認めたという。彼の論理の無誤謬性が改めて彼をうちのめす。そのため彼は熱病にまでなるのだが、やがて彼はそこから解放されることになる。彼を論理の緊縛から解放したきっかけはひとつの重苦しい終末論的な夢で、アジアから到来した恐るべき伝染病、旋毛虫病の如く、人々の心を蝕む伝染病だった。人々は自分だけが正しいという自我病にとりつかれたのだ。その結果社会も国家も荒廃し、滅びてゆくというものだった。ラスコーリニコフはここにおいて始めて彼の論理の緊縛から解放されたのだ。ところで彼に論理的無誤謬性とみえたものの本質はなにか。彼の論理はナポレオンは戦争で大量殺人をなしても英雄だが、通常の人間がたったひとりでも殺せば、犯罪者となるという現実の問題から出発して、その論理を築いたものだ。一見してその論理が時空にわたる巨大な現実を、結論の部分だけに捨象して、それを自我意識に絞って、平面的な形式論理に纏め上げたものだということがあきらかだ。自己を一挙にナポレオンやシーザーの自我に並べてみる、それがいかに滑稽かは判らない。問題は自我の絶対化であり、そこにラスコーリニコフの関心の焦点がある。都会という相対性の垣塙のなかで、現実嫌悪と孤独のなかで生きる虚無的青年にとって、自我の絶対性こそが彼の心の拠り所なのだ。

## 二 刹那に賭ける

賭けこそその権力意志獲得の方法にはかならない。その点で『罪と罰』と平行して『賭博者』が書かれていることは極めて示唆的というべきだろう。ここでは主人公は賭博者として金の獲得をめざすが、注目すべきは彼においてはポリーナという女性に対する愛においても賭けの様相を呈していることだ。それは通常の愛の獲得といったものではなくない。彼は自分が果たしてポリーナを愛しているのか憎んでいるのか判らない。彼は「彼女を絞め殺すことができたら、自分の生涯の半分はなげだしてもいい」と思い、「もし彼女の胸にゆっくりと鋭い刃物を突き刺すことができたら、わたしは喜んでその凶器に手をかけたに違いない」といういっぽうで、もしポリーナが「この崖から身をお投げなさい」といったら、すぐさま飛び込むに違いない、しかも喜びさえ感じながら決行したに違いないと告白している。<sup>(3)</sup>通常の愛が愛人の獲得を目指すとしたら、これは全くそのような愛とは異なったものだ。飛び込めというのは、ポリーナの側からいえば、主人公の愛情の絶対性の証明ということになるのだろう。いうまでもないことだが、絶対性の証明としての投身は、死によってただちに絶対性の消失ということになるだろう。しかし主人公にとって重要なことは具体的な愛の獲得などというものではない。愛の絶対性こそ望むべきものののだ。ひとたび愛の絶対性を愛するひとの脳裏に刻印しさえすればいいのだ。ここに賭博者の奇妙な愛のあり方がある。憎しみにしても彼は彼女を殺すことで、憎しみの絶対化をはかる。

さて『白痴』の世界において、愛について同じような光景にぶつかる。ここでも人間関係は激しい緊張関係に置かれている。それは常に一切か無かといった二者択一の賭け的關係に置かれている。それがもっとも激烈な形で現れているのが、ナスターシャがムイシュキンに自分かアグラーヤのどちらかを選べと迫る場面だろう。アグラーヤがナスターシャによばれて訪れたときのこと、そこにはラゴージンもいて、そこで激烈な愛の対決が行われるのだが、二人の女性の公爵をめぐるのいわば愛の鞘当は双方の女性の激しい応酬のなかでエスカレートして、ナスターシャはラゴージンにでてゆけと命じた後、公爵に自分たちのいずれかを取れとせまる。

「もしこの人が今すぐわたしの傍へ寄って、この手を取らなかったら、——そしてお前さんを捨てなかったら、その時はお前さん勝手にこの人をお取んなさい、譲ってあげるは、こんな人に用はないから、……」<sup>(4)</sup>

アグラーヤもナスターシャも狂気の如く公爵を見つめる。しかし公爵にはよくわからなかったらしい。ただ、彼は目の前に、捨て鉢になった狂おしい顔、「永久に心臓を刺し通された」ように思われる顔を見ただけだった。彼はナスターシャを指さしながら、アグラーヤに「ああ、こんなことがあっていいのですか！だって、このひとは、……こんな不幸な身の上じゃありませんか」<sup>(5)</sup>といった。アグラーヤの目のなかに無量の苦痛と憎悪が表れた。彼女は公爵の一瞬の躊躇を忍ぶことができなかった。両手で顔を隠しながら、部屋のそとにとびだした。

公爵はただちに回答は出来なかった。一体このような無謀とも見える選択に誰がこたえられるか。公爵の注意は、ナスターシャの異常な表情に釘付けになる。公爵が一種の判断停止に陥ったのも当然だ。しかしこの一瞬の躊躇によっ

てことは決するのだ。アグラーヤはその一瞬の躊躇に我慢がならなかった。これはなんという愛の対決だろうか。さてこの情景からあぶりだされてくるのは、ナスターシャにせよ、アグラーヤにせよ彼女らにとって重要なのが瞬間的な一つの選択というものだろう。

ムイシュキンの躊躇は基本的にはムイシュキンが二人の女性を愛していたと言う事実による。のちにパーヴロヴィッチに聞かれて、ふたりを愛していると告白している。ただその愛が同等であったかどうか。おそらくそれぞれに異なった愛であったというべきだろう。しかし彼の躊躇はナスターシャの突然の選択、いわば賭けのごとくだちに選ばねばならないことへの驚きによるものであったというべきだろう。すでにそれまでは、公爵はナスターシャとの同棲をへており、またアグラーヤとの結婚の話も進んでいた。彼はアグラーヤにはナスターシャとの共生を通じて、ナスターシャの性格を知り、もし二人が結婚したら、「ふたりとも身をほろぼしてしまふ」<sup>(6)</sup>とまで語っていた。しかもナスターシャはアグラーヤに手紙を出し、アグラーヤに公爵との結婚を頼みこんでいたのだ。ナスターシャの突然の公爵にたいするいづれかを選ぶという申し出は一挙にそれまでの過去を無化し、愛の問題が愛するという言葉の次元へと二元的に抽象化される。これはナスターシャの言葉に現れているように一切が無かという愛の賭けだ。アグラーヤが憤然と立ち去ったあとナスターシャは公爵は自分のものだとかぶが、これは賭けに勝利したことの宣言だ。どうやらナスターシャにとって重要なことは、公爵の愛の獲得というよりは、愛の勝者であるという自負心の満足だったようだ。

一度は結婚を約束しながらその間に逃げ出した彼女がなぜ再び公爵の愛を求めたのか。これはアグラーヤとのや

り取りの過程で彼女のうちなる自意識が刺激されたことによるのだらうと思う。ナスターシャはアグラーヤに公爵との結婚を勧めながら、土壇場になってそれまでの提案もなんのその、公爵に愛をえらばせる。一方アグラーヤにしてみても、その賭けをうけいれるのだ。実際に公爵はナスターシャを選ぶといったわけではない。一瞬躊躇ったのを、アグラーヤは自分は捨てられたと思ったのだ。ナスターシャにせよアグラーヤにせよ一瞬の選択に全てを託すという点では共通する。必ずしもナスターシャだけではない。アグラーヤもまた、ガーニャが自分に愛を誓って、指を蠟燭で焼いたなどと公爵に語っている。その行為のなかに愛の絶対性を見ようというわけだ。

しかしこのようにして示された愛が真の愛というものであろうか。すくなくとも通常の愛ではない。このナスターシャの行為には公爵もいう多分に狂気が存在していたといえる。ラゴージンの去ったあと、公爵は殆んど正気を失ったかに思われるナスターシャを幼児を相手にするように、両手でなでさすったという。

### 三 自己破壊という復讐

ナスターシャの自意識は深いトラウマによって傷つけられているから、一層それは自己の絶対性・唯一性に鋭敏になる。深いコンプレックスにとらわれたものはその自意識の主張において激しくなるだらう。それがはたして真実の愛情というものかどうかは判らない。自己の絶対性・唯一性の主張はおそらく真の自己というものではないだらう。



それは変調された自我、観念によって肥大化された自我だから。このような自我は眞の愛の持つ確固とした持続性に欠ける。賭け的行為に愛の確証を求めることは実はそこにしっかりとした愛の確信を欠いているということを意味する。したがって、アグラヤーから公爵を我が手に獲得したにも拘らず、再びナスターシャは結婚式の場から、ラゴジンに助けを求めて逃げ出すことになる。しかもその先には死が待っているであろうことを予測していながら。

既に公爵はアグラヤーにナスターシャとの結婚は自分たち二人の破滅だと語っていた。それが再び繰り返されようとしていたというわけだ。しかし今度は彼女は破滅と知ってラゴジンのもとに走ったのだ。そしてそれが現実のものとなった。彼女はラゴジンの短刀によって心臓を突かれ、死ぬ。

このような死は決してナスターシャがラゴジンの犠牲となったと理解すべきものではないだろう。むしろラゴジンの協力のもとに死を選び取ったとさえいえるのではないか。なぜか。ナスターシャにとって愛は、幸福なる家庭をつくるためのものではない。そのような地上的愛は彼女には全くかかわらない。愛の絶対性こそ彼女の求めるものだ。彼女は公爵の選択によってそれを確かめることが出来たと思った。それで十分だ。地上的生活はむしろそれを頽落させるに過ぎないものとなるだろう。これは『賭博者』の主人公がポリーナが飛び込めといったら飛び込むとのべた決意と共通するといえる。

ナスターシャの性格の激しさについて、第一章の終わり、ガーニャの家でナスターシャが暖炉に新聞紙に包んだ大金を投げこみ、ガーニャに欲しければそれを拾えといった極めてドラマチックな場面のもと、トーツキイとプティー

ツインのふたりの間で交わされる会話が極めて示唆的だ。そこでプティーツインはナスターシャの行為が日本における奇妙な風習を連想させるといって、日本の腹切り、そのなかでもいわゆる無念腹とよばれる切腹について語る。

「恥辱を受けたものが当の相手のところへ行って、いうじゃありませんか。『お前は俺に恥辱を与えた、だから俺はお前の目の前で腹を切って見せる』こういうと一緒に、本当に相手の目の前で自分の腹をかっさばいて、それで本当に仇討ちが出来たような気がして、非常な満足をかんじるらしいんですね。世の中には奇態な性質もあればあるものですね」

つまり一種の復讐なのだがこの復讐の奇妙さは相手を傷つける代わりに自身を傷つけると言う点にある。たしかに西欧的復讐からすれば馬鹿げている。しかしナスターシャの奇怪な行動の説明としてそれを持ってきたことは、そのような例によってしか説明する手立てがなかったということだろう。いわば彼女の行為は復讐なのだ。しかもそれは自己破壊というかたちでの復讐なのだという。

ここでナスターシャのガーニャにたいしてなした行為を見てみよう。そこにどのような復讐の感情が現れているか。それはナスターシャがガーニャに最終的な回答、ガーニャとの結婚に関する最終的な回答を与える日のこと、公爵はナスターシャに結婚の諾否をまかせられ、結婚しないほうがよいと助言する。そのときラゴージンがその一党をつれて闖入してくる。そしてラゴージンはナスターシャを十万ルーブリで買うと宣言する。ナスターシャはその金を受けとるや矢庭にそれを暖炉に投じたのだ。そしてそれを暖炉から引き出せば、ガーニャのものだという。この驚くべ

きナスターシャの言葉は一同を恐るべき緊張のなかに叩き込む。しかし息詰まる空気の中でガーニャは結局暖炉のなかで燃え始めた新聞紙の包みを引き出さなかった。結局プライドが勝ちをしめたのだ。しかしナスターシャは新聞紙の燃える寸前にそれを暖炉からひっぱりだした。そしてそれをガーニャに与え、ラゴージンの一党と氣勢をあげて街へと飛び出していった。

ナスターシャはその少女時代トーツキイによって養われ、長じてその囲いのもとして過した。トーツキイは家庭教師もつけて教養を身につけさせたが、自我覚醒の時代的風潮のなかで彼女の自我は恐るべく発達を遂げ、トーツキイの手には負えなくなった。トーツキイはエバンチン家の長女との結婚を予定している。年齢の差もトーツキイの社会的地位の前には障害にはならない。ただひとつの厄介な問題がナスターシャの身の振り方だった。そこでトーツキイはナスターシャをガーニャに嫁がせることを考え、目下画策中である。ナスターシャの行為はそういうトーツキイへの当てこすりであることは言うまでもない。のみならず、彼女はいわば十万ルーブリで自分を無頼漢然としたラゴージンの前に売るかのごとき行為を敢てして、しかもその金をガーニャにあたえようという。その与え方の凶暴なこと。ここでもまたナスターシャはガーニャをして選ばせたのだ。プライドか金か、金万能の社会にたいする挑戦がここにある。これも一つの賭けだが、人間としての誇りか、それとも十万ルーブリという大金をとるかという賭けだ。これは余りにも奇怪なことだ。暖炉の前にはいつくばって十万の大金をまもるか、それとも守銭奴という汚名を、大金の札束が燃えて煙となるのと引き換えにそそぐか。ラゴージンはガーニャは三ルーブリのためにはヴァシリエフスキ

イ島にまではって行く男だということを、レビヤートキンに衆人の前で確かめていた。ナスターシャは一同の前でその言葉を引き、金を暖炉に投げこんだのだ。これはガーニャにとって甚だしい侮辱と言わざるをえないだろう。それは三ループルでヴァシリエフスキ島にまではって行く男なら、暖炉に投げ捨てられた十万の金を素手であれ拾うのは当然だという侮辱である。ガーニャの眼前におかれた賭けとは彼の侮辱を跳ね除けてプライドを守るか、それとも莫大な大金をとるか二者択一だが、より正確に言えば、ナスターシャのこの挑戦的といってもいい侮辱を耐えるか否かであった。従って、ガーニャが失神したのは、この侮辱にたいする憤怒の余りといったほうが正確であろう。このような侮辱を人間が人間にたいしてなすべきではない。無限に人間を下位にみたものの仕業だ。ローマのハーレムでは女王は奴隷の前で裸体を見せたが、いうまでもなく奴隷は彼女にとって人間ではなかったからだ。ラゴージンが「これが本当の女王様だ！」と繰り返し、「これがおれたちのやり口だ！」と我を忘れて叫んだのもっともだ。ナスターシャはナスターシャで「取りに行かなかった、してみると、まだ自尊心が金の欲より強いのかしら？なに、かまいません、今に息を吹き返しますよ！もし氣絶しなかったら、多分わたしに斬ってかかったでしょう、、、」<sup>(9)</sup>といっている。

ガーニャにとってのこの賭けは同時にナスターシャ自身の賭けでもある。「公爵、生れて初めて人間を見ました！」<sup>(10)</sup>と彼女は語る。ひょっとしたら彼女自身も殺されたかもしれないのだ。賭けは単に理知によってのみ行われるものではない。賭けは存在全体を賭ける行為だ。そこではぎりぎり決着の、人間存在が問われる。ガーニャが全存在を賭け

たと同様彼女自身も大金を賭けている。その金といえば、それは彼女の存在の代価とも言うべきものだ。それを暖炉に投じて、賭け金とする。それもガーニャの人間性の試練のためだ。このこと自体、トーツキイに対する当てこすりでもあるだろう。彼女はその行為によって、いわば自身をそこに投げ出したのだ。プティーツインが日本人の無念腹に比したこの意味がそこにある。そしてここには、彼女の過去、また社会の否定という形での復讐がある。

ナスターシャの恐ろしさは自己を賭けるところにある。先に述べた公爵に自分かアグラヤーのどちらかを選べというのも。自身を賭けの賭け金に差し出したということだ。あるいは彼女は全く初対面と断言いい公爵にガーニャとの結婚の決定権をまかせるのだ。恐らくは公爵の人柄をみこしてのことだが、それにしても、これはやはり大胆な賭けといわざるを得ないだろう。自分の運命を全く知り合っていない他者の手に委ねる、これは自我主義者だったら許せないことだろう。しかし選ばれるということ自体、実は公爵の人間を試すということでもあるのだとすれば、ナスターシャのこうした賭けに運命を委ねる行為とは、ある意味で自分を賭けるというぎりぎりの行為を通して人間の裸形の真実を手にしたという狂暴に近い情熱の表現だったともいえる。そこに人間が虚偽と仮面のなかに生き死にする近代社会への捨て身の挑戦があった。ナスターシャが結局その無意識的賭けの行為によって求めているのは愛の絶対性にはかならなかったのだ。

#### 四 ラゴージンの虚無感覺

七〇〇

ナスターシャの激しい行為からあぶりだされてくるのは、全存在を賭けた愛というものだった。それではこのナスターシャにたいするラゴージンの愛とはなにか。公爵はガーニャの家で最初ラゴージンのナスターシャにたいする態度の激しいのを見たとき、死刑囚の切羽詰った感情をそこに読み取っていた。いわばラゴージンとはナスターシャへの愛によって死刑執行された存在なのだ。ナスターシャの愛なしには生きていけないという、愛の絶対性に捉えられた存在がラゴージンだ。彼は一瞬たりともナスターシャと別れていることが出来ない。しかも彼の愛はナスターシャと幸福な家庭を築いていくようなものではない。公爵は早くから、ラゴージンの愛の激しさがナスターシャに死をもたらずと預言していた。これはなぜか。彼の愛の絶対的性格からくる。彼はナスターシャをその全体において所有しなくては気が済まない。しかしこの女王的高慢を所有する女性がそのような占有的愛に満足しているはずはない。大體真実の愛はそのような、息の詰まるようなものではないだろう。相手の人格を認め、相手の自由の尊重のうゑに立脚しない真の愛などあるものではない。しかしラゴージンにおいては全くそのような愛はない。しかも彼の愛は占有的でありながら、同時に奴隸が女王に仕える絶対的服従の愛でもある。是はいかにも矛盾しているようだが、ともに彼の愛の絶対的性格による。

このような占有的にして奴隸的愛は何故生じたか。恐らくそれは彼のうちにある不安のためではないだろうか。彼

は彼が愛されているという確信を持つことが出来ないのだ。だからこそしっかりと全面的に彼女を自分の傍に緊縛しておかねばならないのだ。彼はナスターシャをその女王的高慢さのゆえに愛した。彼にとって彼女の過去など全く問題にはならない。その点では公爵以上に純粋な愛といえる。しかしその女王的高慢さゆえに彼女は彼の占有的愛を拒否する。通常ならばそういう愛は諦めるものだろうが、ナスターシャの傲岸不羈の美こそがラゴージンの存在全てを魅了した以上諦めるなどということは出来ない。いわば宿命的な愛であり、ラゴージンにとってナスターシャはファム・ファタールなのだ。宿命的な愛は死によって終る。なぜラゴージンはそこまで思いつめたか。そこにあぶりだされてくるのは、ラゴージンのなかの虚無の感覚である。公爵が死刑囚に近似するものを、ラゴージンの求愛のなかに感じたのはそのことを意味する。IPPOLITOもラゴージンのなかに彼と同じものを感じている。IPPOLITOはラゴージンにパスカルの『パンセ』の一句両極端は一致するという言葉をひいて、そのことをいつていた。荒寥たる虚無のなかに生きるラゴージンにとってナスターシャの愛だけがこの世に意味を与えるものなのだ。

公爵はラゴージンの家を訪れ、二つの絵にショックを受ける。一つは彼の父親の肖像であり、一つはホルバイン・ジュニアのキリスト像だ。公爵は父親の肖像にラゴージンと酷似した魂を見る。公爵はラゴージンが、もしナスターシャに出会うことがなければ、かれの生涯を、その陰鬱な家のなかで蓄財の情熱を燃やし続けて終えたらうというのだ。ラゴージンはまったく同じことをナスターシャも彼に語ったと言う。

さてラゴージンの父親というのは自宅に去勢派を住まわせ、旧教徒にたいしても同情をもっていたという。去勢派

とは、狂信的な正教の異端だ。それは狂信のあまり自らを去勢せずにはいない。高利貸という職業と異端の狂信は恐らく通底しあうものではないだろうか。金を蓄財するという行為は、なにかしら絶対の探求に似ている。金と言うものの持つ抽象性は非物質的な力の感覚を人間のなかに呼び覚ます。金の増大は決して現実的な力の増大を呼び覚ましはしない。大体力というものは抽象的なものだ。われわれは力を具体物として現実化することは出来ない。光と同じく力はそれが作用する結果によってしか現れない。例えば重力を我々は眼にすることはできない。具体的な物は、我々はそれを消費することによって、我々のうちに取り入れる。しかし金という抽象的なものは、我々はそれを取り入れることは出来ない。しかしそれは力の意識に転換するだろう。この力の意識とは、それがあらゆる物質に変換しうるという可能性の意識だろう。一方力とは自己の意志を自由に行使しうるという意識だ。ここにおいて蓄財の意味が明らかになるだろう。蓄財とは自己のなかに無限に拡大する力の意識を追って行くことだ。それは決して具体的な消費などを目的とはしない。最初はそのような目的から発したにせよ、それは抽象的な力の意識の追及に転化する。ひとたび転化するや、具体的な消費の欲望に戻ることはない。ひとたび抽象性の絶対感覚を味わったものは、現実的な欲望の充足のもつ有限性には満足しないからだ。現実的な欲望の充足とは肉体的な感覚性の領域のなかに留まっているからだ。それは抽象的な力の持つ無限の陶醉感に欠ける。

ラゴージンの父親が去勢派を愛し、旧教徒に同情を有していたというのも以上のような理由から理解されよう。去勢派とは純潔を尊ぶ余り罪の根源たる性器を切除するものだ。自らの肉体の罪の汚濁の可能性のなかに躊躇するより



は、澄明な靈魂の飛翔のなかに常に身を置くことの歓喜を選ぶというものだ。旧教徒もまたいわゆるニコン改革を拒否し、それ以前の信仰を守り続ける狂信の徒だった。これらの狂信の徒はいずれも通常の教会には所属せず、そのセクトの内部にとじこもっている。閉鎖的な密室性がその特長だという。ラゴージンの家の印象はまさにそのような閉鎖性を表している。

父親のなかにある狂信的なものがラゴージンに伝わったのだ。しかしラゴージンにおいては金がナスターシャという人間にとって代わったといえる。もはやラゴージンにとって金は意味を持たない。美が金にとって代わったということは、単に一つの情熱が一つの情熱を追いだしたと言う話ではない。蓄財というものがなんら人間にとっての絶対性を持ち得ないということを、美が彼に開示したということなのだ。蓄財とは力の意識に根拠を置くことだ。力の意識とはそれを行使しうる可能性の意識だ。しかし行使しうるのは人間が生きている限りにおいてである。死に直面したとき、もはやそれを行使することはありえない。そのときにおいて、力の意識はなお存続しうるだろうか。おそらく存続することはないだろう。真の絶対は「今このときに」でなくてはならない。美こそその要求を満たすはずのものだ。それはその瞬間において人間を至福感で満たすことが可能だろう。ラゴージンをしてこの転換をおこなわせたのは彼のうちなる虚無の感覚だ。それは彼の家のもう一つの絵、ホルバインの「死せるキリスト」の絵によって開示されたものだ。彼は公爵にそれを見ていると信仰をなくすと語り、公爵に信仰をもっているかと聞く。公爵は其れに対して直接的には答えない。公爵はそのかわりにロシア人の信仰について説く。この答えはたしてラゴージンを

満足させようか。いずれにせよ、公爵の説いた信仰なるものは民衆のなかにある信仰心に触れたものであり、彼自身  
の信仰を告白したものではない。

## 五 ロシア人の信仰

公爵はロシア人の信仰に関して四つの話をした。最初はある著名な無神論者の話、つぎにある人殺しの話。それはある農民が連れの農民のもっている銀の時計が欲しくなり、「神よ、イエス・キリストのために許し給え！」<sup>(1)</sup>といって時計をとったという話。次に実際には真鍮の十字架を、銀の十字架だといって二十コペイカで買ってくれといった兵隊の話をする。公爵は騙されたと知って、買ってやる。兵隊は間拔けな旦那を騙してやったという大満足な顔で、その金で酒を引っ掛けに言ったという話。最後に、乳飲み子をかかえた女房の話。彼女は、はじめて赤子の笑い顔を見た母親の喜びを罪びとの祈りを天上から見る神の喜びと同じだというのだ。公爵はこれらの人々の行為のなかに、民衆の信仰の醇乎たるを見るのだ。こうした民衆にとって、神の存在を疑うことはないのだ。それは祈りをしてから殺人を行うという行為に端的に現れている。しかしこのことは、公爵が神を信じているというのとは自ずと異なる。もし神に対する信仰を公爵が有していたとするならば、彼の対応は異なったものになるだろう。公爵の言葉は、民衆の中の神に対する絶対の帰依についていわば客観的に述べている。しかし一度、民衆のなかに入ってみた場合、殺す

あるいは殺されるという当事者同士の問題として考えた場合、そのような客観的な指摘だけでことが済まされるのだろうか。殺されたほうにしてみれば、神にやはり責任をとってもらいたいということになるだろう。それとも殺される側もそのまま殺されることを神の御心として甘受するのだろうか。しかしこれでは、信仰というものの意味が無意味になってしまうのではないか。そして公爵自身はといえば、ラゴージンの殺意に慄くのだ。

ラゴージンは公爵が農民から買ったという錫の十字架を自分の金の十字架と換える。そして別れ際に、ナスターシャは公爵に譲ったと誓ったのだ。これらは感動的な言葉であり行為だが、その心はというと必ずしも明らかではないだろう。農民の信仰にあやかりたいと言う行為なのかどうか。むしろそれは彼のうちなる衝動への認可とも言うべきものではなかったか。彼は公爵を目の前にしているときは愛情をかんじているが、一旦離れると激しい憎悪を感じると公爵に告白する。ラゴージンはそのような自分を、抑えようもしない。そして短刀でもって公爵を襲うのだ。そこになんら躊躇はない。ラゴージンの直情径行の激情の暴発は一貫している。それは神に祈りつつ、欲望の遂行のために仲間を殺す農民と共通している。ここにはそれが破壊であろうがなかるうが、情熱の暴発に身を委ねて何ら躊躇うことのない純一性が現れている。公爵が民衆のなかにみた信仰とは結局こうした純一性ではなかったらうか。このような純一性に比べて、公爵はどうか。アグラヤと婚約し、またナスターシャと結婚しようとする。ナスターシャが愛の選択を迫ったというのも宣なるかなではないか。信仰というものがそこに徹底した純一性を前提とするならば、ラゴージンのほうが真の信仰に近いとさえいえるのかもしれない。公爵はモスクワからペテルブルグに帰ってから、

自分を伺う目を感じるようになる。一体これはなにか。いうまでもなくラゴージンの目だが、このなにかしらユーゴーの詩「良心」に見るごとき、地の果てにまでおいかけてくるかのごとき目はなにか。それは公爵の命を狙う目だが、それよりも公爵の愛がラゴージンの愛の純一性と徹底には及ばない心の隙をうかがう目なのだ。公爵はラゴージンに襲われ、癲癇の発作によって、危機を脱する。なぜこのとき癲癇の発作が起きたのか。極度の緊張のためだろうか、そこに一種の自己懲罰があったためではないか。

## 六 ナスターシャの狂気

既にのべたように、公爵には独特な虚無の感覚がある。かれは人々の間にあって突然一切の人間関係を絶ってどこかたったひとりにこもりたい衝動にかられることがある。彼は美は世界を救うといいながらもその美のなかに安住することも出来ない。彼はナスターシャを深く愛し、またアグラヤも愛しながらも、彼のうちなる虚無の感覚を超えることは出来ない。この感覚は美をも破壊するといっている。彼はナスターシャについては単に美しいというだけにとどまらず、恐れをいだいていた。

「この顔はまだ写真を見たばかりのときから、彼の心に激しい憐愍の苦痛を呼び起こした。この人物に対する同情と苦痛の感銘は、今まで一度も彼の心を離れたことがない。今でも離れないでいる。おお、それどころか、かえって

余計に激しくなっているのだ。けれども、ラゴージンにいつて聞かせただけの説明では、公爵はまだ不満足であつた。ところが、たった今、思いがけなくこの女が姿を現した刹那、恐らく一種の直覚の働きでもあろう、彼はラゴージンに話した自分の言葉に不足していたものを了解した。ああ、この恐怖を言い表すには、人間の言葉は余りに貧しい。そうだ、恐怖である！彼は今、この瞬間にそれを完全に直覚した。彼は特別な理由によって、この女が氣違いだと信じた。徹頭徹尾そう信じて疑わなかった。もしひとりの女を世界中の何者よりも深く愛し、あるいはそうした愛の可能を予感しつつある男が、突然その女が鎖に繋がれ、鉄の格子に閉じ込められ、監視人に棒で打たれているところを見つけられたらどうか、——こうした感覚こそ、いま公爵の直感したところのものに、幾分似通っているかも知れぬ。」<sup>(12)</sup>

これは公爵が三カ月以上も会わないでいて、パーヴロフスクの停車場のオーケストラをききに行つて、ナスターシャを発見したときの印象である。公爵はエパンチン家の人々と駅の横手の出口近くに陣取っていた。そこに十人ぐらいの一隊が、三人の美女を先頭に現れた。それは他の群集とは截然と異なる、一種特別な一団だった。大声で喚き笑い、多くのものが酔っ払っていたらしかった。奇妙な格好で、興奮した顔のものも多かった。軍人もいれば、年配のものもあり、優美な仕立て服に指輪やカフスボタンを光らせ、髪をつけ、頬髯をたてた裕福らしい男たちもいた。広場におりるには段々を三段降りねばならない。一団はその上で止まった。敢て階段をおりかねる風だったが、その一団からひとりの女が平然と前に進み出た。ふたりの男があとについた。中年の風来坊らしい男と、ごろつきの気味悪い風体の男だった。彼女はひとつがついてこようと、こまいと同じことだと言わんばかりに声高に話したり笑ったりして、

楽隊の傍を横切って、広場の向こう側に進んでいった。そこに馬車があった。公爵がみたのはこのようなナスターシャだったのだ。この全く傍若無人な態度のなかに、公爵はナスターシャの狂気を直覚したのだ。既にこの一団自体が良俗にたいする不敵な挑戦だろうが、その一団も敢てしない、聴衆の環視のなかを談笑しながら通り抜けるという無作法のなかに、公爵は異常なものを感知したにちがいがなかった。

このようなナスターシャの態度が真の狂気であるかどうか、と言う点についていえばいわゆる精神異常とはいえないであろう。公爵が狂気と感じたのは、ナスターシャのもつ世界を相手にまわしてもある一線だけは絶対に譲らないという偏執の激しさだったろう。いわば絶対的な自尊にたいする偏執である。いうまでもないことだが、彼女のようになるトラウマの生み出したものだ。トラウマはそれが魂のもっとも奥深いところに形成された傷であるがゆえに、それを取り除くことは出来ない。取り除くことはその自我の否定にほかならない。トラウマこそ彼女のうちなる絶対なのだ。いわば彼女のレゾン・デートルなのだ。したがって他者がその自尊を傷つけようとするならば、それにたいして彼女のうちなる絶対は頭を持ち上げ他の一切の配慮を押しつけて猛烈に反発するだろう。よしんばそれが自らの死であろうとも。元来狂気というものは一種の感情のなかの、自己から発したものであるというよりは、どこから発し来ったか不明の感情であろう。それは人間から発したかに見えながら人間を超え人間を支配して、そこから人間の抵抗力を奪い去ってしまうものだろう。そういう点でそれは絶対なるものに通底する。ひとたびこのような狂気の感情に捉えられるや、ひとはそこから抜けがたいものを感じずに違いない。絶対的な感情のもつ誘いである。狂気は自意識の

絶対性から発し、それを一層強化したものに他ならないだろう。これは大変逆説的な言い方になるが、一度狂気に囚われるや、その狂気から癒やされることを望まない。そこにはアドラーいうところのメシア・コンプレックスが存在するのかもしれない。先に見たガーニャにたいするあの狂的な激しい行為にみた女王の傲岸の意識は、彼女の悲惨を越えさせる陶酔感にみちたものといえる。丁度麻薬患者が麻薬から離れられないようなものだ。麻薬の人間に与える擬似的陶酔感は現実感覚を遥かに越えさせるからだ。このいわば墜落することによる陶酔感は公爵によっても指摘されている。公爵はかつてナスターシャと共に過ごした日のことを回想してアグラヤに次のように語ったことがある。

「あの不幸せな女は自分が世界中で一番墜落した、罪深い人間だと、深く深く信じ切っているのです。ああ、あの女を辱めないでください、石を投げないでください。（中略）あの女が僕のところから逃げ出したのは、なんのためかご存知ですか？つまり、自分が卑しい女だってことを証明するためなんです。しかし、なにより恐ろしいのは、——あの女がそれを自分でも知らないで、ただなんとなく卑劣な行為をしでかして『ほら、お前はまた新しく卑劣なことをした、してみると、お前はやっぱり卑劣な動物なんだ！』と自分で自分を罵りたい、必然的な心内の要求を感じたために逃げ出した——その事実なんです。おお、アグラヤ、あなたにはこんなこと、おわかりにならないかも知れませんか！しかし、こうして絶え間なく自分の穢れを自覚するのが、彼女にとってはなにかしら不自然な、恐ろしい愉快かもしれないんです。ちょうどだれかに復讐でもするような快楽なんですな。」<sup>13</sup>

ここで直ちにプティーツィンがトーツキイに語った、ナスターシャの行為を日本の腹切りにたとえた言葉が思い浮

かぶ。なぜ復讐に快感が伴うのか。しかも自己破壊だというのに。そしてこの場合一体誰に対する復讐というのか。それは単にある個人に対してのものではないだろう。例えば、この場合はトーツキイにたいしてだが、最初はトーツキイに対して強い復讐の念を抱いていたにせよ、彼にたいしての憎しみの感情の幾転変を経て、次第にそれは超えられていったのだと思う。それでは社会にたいしてかといえば、それはいまや輕蔑の対象ではあれ、復讐の対象ではないだろう。注目すべきは、彼女のうちの罪の意識だ。如何なる人間よりも墮落しているという意識の存在だ。この意識こそ彼女を自己破壊による奇妙な復讐に駆り立てるものであるに違いない。この意識は境遇のなから生れたものだが、彼女の女王的傲岸な自我は、自己の不幸を単に受動的にうけとめるだけでは満足しない。それは自分をそのような状況に落とし入れたものとしての創造主に矛先をむける。復讐とは創造主にたいする復讐に他ならない。造物主にたいする復讐とは無限の自己破壊である。そしてそこには、擬似絶対性の感覚が潜む。「おそろしい愉楽」と公爵が語ったのはそのような絶対性の感覚に他ならない。

狂気にも聖なる狂気と悪魔的狂気とある。『悪霊』のレヴェジャートキナが前者とすれば、このナスターシャの場合どうか。絶対的に妥協を知らない、倨傲の自意識は、これはむしろ悪魔的というべきものだろう。狂気に身を任せながら、それはじつは人間破壊という悪魔の歓迎する神に対する復讐行為の手助けに没頭しているということになる。

公爵がなぜナスターシャを救えなかったという点について、公爵が憐憫を以ってしたという考えがある。たしかに



公爵自身もその点についてもアグラーヤに次のように述べている。

「ときどき僕はあの女が、周囲に光明を見るようになるまで導いてやりましたが、すぐにまたむらむらと取りのぼせて、果ては僕が一段高くとまって澄ましてるといって、ひどく僕を責めるようになりました（ところが、僕、そんなことを考えてもいなかったですよ）。そして、僕の結婚申し込みにたいして、こんなことをむきつけに言うんです――わたしは高慢ちきな同情や、扶助や、ないしは『ご自分と同じように偉くしてやろうという親切』なんか、決して誰からも要求しません、なんてね。」<sup>(14)</sup>

公爵はまた「僕があの子を憐れんでるだけで、もう愛してはいないこと」をナスターシャが悟ったとも言っている。ラゴージンも公爵の憐憫の方が彼の愛よりも強いといっている。これらからみればたしかに公爵の愛は憐憫の愛であるということは言えるかもしれない。一般的にいつて憐憫というものが一段高いところから相手を見下ろす愛だとすれば、たしかにナスターシャの反発を買うのは当然であつたろう。しかし公爵にはそのようなところがあるはずもない。ナスターシャの公爵拒否はもっと深いところにあつた。彼女の自己破壊にひそむ悪魔的なものが、聖なるものを本能的に拒否したということだ。

トラウマの絶対性はその所有者に破壊を齎し、それは自己破壊に至るまでトラウマの絶対性によって駆られ続けることになる。なぜならそのときにおいてのみトラウマは解消するからだ。しかしそのとき自己は存在しない。この自己破壊が自分自らの手によるものであれ、ラゴージンという他者の手を借りるものであれ、同じことだ。

公爵の恐怖はこうしたナスターシャの狂気の破壊的性格、敢て言うならば悪魔的といつていいほどの憑依的性格に由来するものだったろう。そして公爵が先の引用において記したように、愛するものが「鎖に繋がれ、鉄の格子に閉じ込められ、監視人に棒で打たれている」と感じたのは、悪魔の囚われ人の愛人に彼の愛が届かない、絶望の表現に他ならなかった。

## 七 憐憫の限界

公爵は憐憫はキリスト教の大きな力だとラゴージンに語ったことがある。かれはナスターシャの過去についてそれはなんらナスターシャの罪ではない、と語ったこともあった。そしてナスターシャ自身もそれを理解したといつていい。にもかかわらず、ナスターシャの破滅を救うことは出来なかった。それはなぜか。前の論文において根本的には公爵自身の信仰の欠如によると書いた。では公爵に確たる信仰があったならば救えたらどうか。

ナスターシャが公爵のもとから逃げ出したのは公爵を傷つけてはいけないと言う配慮からだつたと彼女は告白している。これは公爵の側からいえば無用の気遣いだったろう。ここに働いているのは白痴と笑われている公爵にたいするいたわりの気持ちだろう。ナスターシャには公爵の純粋な人柄は十分判っている。その純粋性を傷つけないというのが彼女の心情だろうかと思う。興味深いことは公爵はひとびとの過ちを許す寛大さを説きながら自分自身を罪

深いものとして責めていることだ。ここに公爵の美しさがあるのだが、この心情はまったく自意識の絶対性を突き出すナスターシャとは対蹠的だ。ナスターシャにとって公爵とともにいることは倨傲にみちた自己を鏡にかけて見せ付けられることに他ならない。これは彼女のトラウマにとって最大の苦痛なのだ。なぜならナターシャにおいてトラウマは絶対的なものだからだ。

もし彼らがどこか無人島でふたりだけで生きていたならば、ナスターシャのトラウマはもはやその魅力を失っただろう。しかし二人の置かれている社会状況においてこそ、トラウマはその絶対的な性格を持つ。彼女をトラウマの絶対性の憑依に追いやるのは社会の偏見、彼女の過去あるいは現在に対する偏見なのだ。社会は人間を判断するに過去あるいは現在のその人間の行為をもってする。表面の表れをもってする。その背後に潜む苦悩など斟酌はしない。公爵だけがその同情心の深い共感 (соотрапание) によって苦悩する魂の深部に達する。しかし世間一般は逆にそのような公爵を詐欺師としか見ない。なぜなら深い人間的洞察など白痴が持ちうるはずはないと決めて懸かるからだ。こうした社会的偏見ぐらいナスターシャの心を激させるものはない。かつてトーツキイの想いのものという偏見によって傷つけられたナスターシャはいまや公爵との結婚によって、社会の嘲笑のなかに置かれることになる。

「結婚の前夜、公爵と別れたときのナスターシャは、珍しく元気づいていた。ペテルブルグの婦人服屋から明日の衣裳、—— 式服、頭飾り、その他さまざまなものが届いたのである。公爵は、彼女がそれほどまで衣裳のことで騒ぐうとは、思いがけなかった。彼は自分でも、一生懸命にほめそやしてやった。その褒め言葉を聞いて、彼女はなおさ

ら仕合せらしい様子であった。ところが、彼女はちょっと余計な口をすべらした。彼女は町の人がこの結婚を憤慨していることも、五、六人の暴れ者がわざわざ作った風刺詩に音楽までつけて、家のそばでひと騒ぎしようと企んでいることも、またその企みが町民の応援を受けんばかりのありさまだ、などということを聞き込んでいた。で、今はなおさらこの連中の前に昂然と頭をそらして、自分の衣裳の贅沢な趣味でみんなを煙にまいてやろうという気になったのである。

『もしできるなら、怒鳴るなど、口笛を吹くなどしてみるのがいい!』

こう思っただけで、彼女の目はぎらぎら光りだすのであった。<sup>(15)</sup>

しかし公爵のところに使いがきて、大変悪いから来て欲しいとつける。公爵がゆくと、花嫁は寝室に籠もって、ヒステリーの発作に絶望の涙を流していた。ひとり中に入った公爵の前にひざまづき、痙攣的に公爵の両足をかきいだきつつ、彼女は叫んだ。

「わたしはなんてことをしてるんでしょう! なんてことを! あなたの身をどうしようと思ってるんでしょう!」<sup>(16)</sup>

このあと公爵の慰藉でナスターシャの発作は鎮まり、その夜は休む。しかし翌朝八時におこなわれる式に教会に向おうと家の階段から群集の中に飛び込んだ。ラゴージンの目を群集のなかにとらえたのだ。狂気のように「助けて!」<sup>(17)</sup>と叫ぶ。

結婚前夜の状況から式当日の逃走までのナスターシャの行動が語っているものはあきらかだろう。いざ結婚という

状況の切迫が彼女のトラウマをよびましたといえる。そして式当日家を取り巻く群衆の嘲弄的な叫びが最後の火をつけたのだ。この場合、ラゴージンに「助けて！」と叫んだことは興味深いものがある。ラゴージンのもとに走るのが、ほとんど死に繋がることはわかっている。それがどうして助けると言うことになるのか。これは難解な疑問だがこういうことではないか。公爵との結婚はトラウマの死だ。彼女にとってトラウマこそ命なのだ。一方その知らせを聞いて公爵は、自分も心配はしていたが、まさかこんなになるとは、といいながらも次のように言い足したという。

「もっとも、、、あれの境遇になってみたら、、、当然すぎるかもしれません」<sup>(18)</sup>

この公爵の言葉はナスターシャのトラウマの深さをよく見抜いていたということを示す。このあと公爵は二人の行方を追ひ、遂にラゴージンの家の書斎にはいり、ナスターシャの死体を見せられる。ラゴージンはいかにナスターシャが公爵を怖れていたか、「汽車の中ではまるで気違いさ。それもこれもみんな恐ろしいからだよ。」と、公爵が彼女をさがしだしやしないかをいかに怖れていたと語る。なぜナスターシャはそれほど公爵を恐れたのだろうか。それは彼女が公爵を裏切ったということのためではないことはいうまでもない。公爵は決して自分を責めることはしない。彼女は公爵の優しさこそが恐ろしかったのだ。

こうして公爵の憐憫はナスターシャを救うことは出来なかった。公爵の人格の美しさが、皮肉にもナスターシャをして自らの破滅をえらびとらせたということになる。そしてラゴージンをも破滅にみちびいた。それは同時に公爵自身破滅でもあった。

## 八 虚無の荒野

七二六

悲劇にはカタルシスを伴うとは良く知られているアリストテレスの美学だ。この場合も強いカタルシスの感情が、女主人公の死を巡って呼び覚まされる。通常悲劇の主人公は愛するもの同士二人だが、この場合は奇妙な三角関係の悲劇だ。問題はそこに憎しみが徹底的に欠如していることだ。ナスターシャの死に連れ添う公爵の態度には愛するものの加害者にたいして通常有するはずの憎しみを全く感じさせないものがあるといえる。また恐らくラゴージンにも罪の意識はない。公爵をナスターシャの横たわる部屋に導き入れるラゴージンの態度はどうだろうか。これはかなり奇妙なことと言わねばならないだろう。ラゴージンはその嫉妬心の激しさにおいてドストエフスキイのオセロといえるが、オセロの最後に持った恐ろしい自責の感情は欠けている。シェイクスピアの場合、カタルシスはオセロの最後に持った激しく自己の愚かしさを罵る言葉の激しさによって喚起されるが、ラゴージンにおいてそのようなカタルシスはないだろう。これはオセロの最後の号泣の呼び覚ますカタルシスにくらべれば、はるかに静寂をきわめたものだ。これは殆ど死の世界を思わせる。そこに佇むのは公爵だが、その姿が喚起するのは、無限の哀憐の情であろう。それは死に行くドン・キホーテが与える哀憐の情に似通う。無垢なるものの地上においてたどらざるを得ない運命を見ることによる哀憐の感情である。

公爵の人間としての美しさは相手に対する無限の理解にある。相手を無限に理解するとき、憎しみは持ち得ないだ

ろう。と同時に、無限に付き合うことにある。それは一切自己主張をもたない優しさによる。彼はナスタシーシャの死体の傍で夜をすごすラゴージンの苦悩にも究極までつきあうのだ。その間かれは恐ろしく体を震わせ続けていたという。ラゴージンは次第に正気を失ってゆく。その傍らで公爵は夜の白み行く中でラゴージンを見守っているのだ。

「時は次第に移り、夜は白み始めた。ラゴージンとはとききだしぬけに、高い、鋭い声で、辻棲の合わないことを口走り出した。叫び声を立てたり、笑ったりすることもあった。そんな時、公爵は震える手を差し伸べて、そっと彼の髪に触ったり、頭や頬をなでたりするのであった、それよりほか、彼はどうすることもできなかった！彼自身もまた震えが起こって、また急に足を取られるような気持ちが生じた。なにかしら全然新しい感触が、無限の哀愁をもって彼の心を締め付けるのであった。やがて、夜はすっかり明け放れた。ついに彼はもう全く力尽きて、絶望の極に達したかのように、床の上へ横倒しになって、じっと動かぬラゴージンの青ざめた顔へ自分の顔を押し付けた。涙は彼の目からラゴージンの頬へ流れたが、公爵はすでにそのとき自分の涙を感知する力もなく、自分のすることにすこしも覚えがなかったかもしれない、」<sup>(2)</sup>

彼のうちにはラゴージンに対する深い同情こそあれ、なんらの憎しみ、また怒りもない。かれの仕事はまったく幼子を見守る母とか、病人をみまもる看護人の行為だった。それは単なる慰めの行為というよりは、ラゴージンの苦悩にたいするいたわりであり、共感にはかならなかった。そしてその共感(соотрапание)の深さによって、公爵はみずからの知性を完全に崩壊せしめたのだ。

## 九 背景としてのニヒリズム

公爵の共感の深さは単にナスターシャやラゴージンにたいしてのみではない。彼の共感はいわば時代そのものに向けられているといえる。彼のうちには時代そのものの虚無性にたいする明確な認識がある。彼はエパンチン家での宴会の際、ローマ・カトリックを無神論の元凶として激しく攻撃したことがある。そこでは公爵としては珍しく攻撃的な論を展開している。公爵のロシアの新時代にたいする態度の根底にこうした無神論観の存在することに注意を向ける必要があるだろう。ラゴージンやナスターシャに対する共感もそこから発している。

話は彼の恩人のパヴリーシチェフがカトリックに改宗したという、ひとりの英国狂紳士の話がきっかけだった。公爵が突然口を切った。あの明るい思想をもったパヴリーシチェフ氏が反キリストの宗旨に屈服するなんてはずはないというのが公爵の主張だった。それから異常な興奮のうちに公爵はこう語った。

「(カトリック)は第一に反キリストの宗旨です。(、、、)第二には、ローマン・カトリックは無神論よりもっと悪いくらいです。(、、、)無神論は単に無を説くのみですが、カトリックはそれ以上に歩を進めています。つまり、みずから讒誣し中傷したキリストを説いているのです、まるきり正反対のキリストを説いているのです、反キリストを説いているのです、誓ってもいいです、まったくです！これはばく自身前から抱いている信念で、僕も自分でこの信念に悩まされたくらいです、、、ローマン・カトリックは世界統一の国家的権力なしには、地上に教会を確立する



ことが出来ないと言明して、Non possumus(我能わず)と叫んでいます。僕の意見では、ローマン・カトリックは宗教じゃなくて、まったく西ローマ帝国の継続です。ここでは宗教をはじめすべてのものが、こういう思想に支配されています。法王は土地と地上の玉座を得て、剣を取りました。それ以来、絶えず同じ歩調を続けていますが、ただ剣のほかに虚言と老獪な行動と、欺瞞と狂妄と、迷信と悪業とを加えました。そして最も神聖で、正直で、単純で、熱烈な民衆の感情を弄び、なにもかも一切のものを、金と卑しい地上の権力に換えてしまいました。これでも反キリストの教義ではなかったでしょうか！こんなもののなかから、どうして無神論が出ずにいられましょう？無神論はなによりも第一にこの中から出て来たのです。ローマン・カトリックから始まったのです。カトリック教徒がどうして自分を信じる事が出来ましょう？無神論は彼らの虚偽と精神的無力との産物です！ああ、無神論！ロシアで神を信じないものは、ただ特殊な階級のみです、先日エヴゲーニイさんのおっしゃった巧妙な比喻を借りると、根こぎにされた人たちばかりです。ところが、あちらでは、西ヨーロッパでは、民衆そのものの大部分が、信仰を失い始めたんですものね——それも以前は暗黒と虚偽のためでしたが、今は教会とキリスト教に対する狂妄な憎悪の結果です。」<sup>21</sup>

こうして公爵は社会主義はカトリック教とカトリック精神の産物であり、無神論同様絶望から生れた、精神的の意味で反対に出て、自ら宗教の失われた権力に代わって、渴ける人類の精神的飢渴を癒やし、キリストの代わりに暴力をもって、人類を救おうとしている。これは決して無邪気な空騒ぎなどと思ったら大変だ、ロシアのキリストを、西欧文明に対抗して輝かさなくてはならないという。この公爵の突然の激しい言葉はいかにも唐突だ。これはドストエフ

スキイ自身の言葉がなにやら現れてきた感じだ。もっとも周囲の人びとは驚きもし、また批判の言葉を挟みもする。だがそれにしても、謙虚で自己主張を凡そ欠いた公爵のこのスラヴ派的愛国心の暴発はなにか。さらにカトリックこそ社会主義を生み出したということは一体どういうことか。いまここではこの問題を追うことはやめよう。ただこの言葉のあと公爵はさらに続けて、ロシアにおける無神論について述べる。ロシア人はカトリックになれば必ずジェズイットになる。ロシア人は世界中どの国民よりも一番容易に無神論になりうる傾向を持つ。しかも単に無神論者になるばかりではなく、無神論を信仰する、まるで新しい宗教のように信仰するという。自分の父祖の地を見棄てたものは、自分の神をも見棄てることになる。ロシアで最上の教育を受けた人たちがさえそのような考えれば、鞭身派（フルイストフシチナ）に走ったことを考えれば、鞭身派がどういう点において、ニヒリズムやジェズイット、また無神論におとるのか、あるいは、それはこんなものよりもっと深みがあるかもしれないと付け加えた。

この公爵の見解は著者自身のものでもあることは、一般的に指摘されていることだ。『作家の日記』に容易にそのような見解を見出すことが出来る。なぜ公爵がこのような見解をここで披瀝したか。作者はこの作品全体の背景として世界に広がるニヒリズムの危機をここで述べたかったのだろうと思う。そして、無神論を神とする、ロシアの社会主義者に対して、無神論をいわば全存在においていきることで超えようとする、三人の主人公ムイシキン公爵、ナスタシーヤ、ラゴージンにたいするいわばオマージュとしたのではないか。

## 十 ロシアのキリスト

作者は『創作ノート』の中で「公爵はキリスト」と繰り返し記している。<sup>(22)</sup>上に述べた、公爵の熱狂的な言葉のなかにもロシアのキリスト待望論があった。ロシアのキリストとはいかなるものか。それは西欧カトリックの説くキリストではない。それは謙抑に満ち、他者を裁かない、無限の優しみに満ちたキリストであろうか。とすれば公爵こそ作者が謙抑に満ちたキリストとして、ペテルブルグに送ったキリストではなかったか。そのペテルブルグでの現れ方は、『カラマゾフの兄弟』の大審問官の章におけるキリストの出現と共通するものがある。

ペテルブルグでの出現以来、彼は人々の人間関係の中心になる。ひとびとは彼を必要とする。彼はしかし決して説教を説くことはない。彼は専ら受身に終始するといっている。いわば彼は他者と同じことん付き合うのだ。他者が彼を騙すのにも付き合う。それは彼の同情による。同情は最大の力とも『創作ノート』は記す。彼は人間の心の奥にまで浸透する同情心を持っている。そこで彼には騙そうとする人間の心の裏が見える。彼が付き合うのはそのためだ。彼は騙されることを怖れない。一方彼を騙したほうは、騙された人の無邪気を嘲りつつ、そこになんらかの罪に似た感情をいだく。その点で次の『創作ノート』の叙述は示唆的だろう。

「レーベジェフは天才的な人間像。／信服し、涙を流し、祈らなばかりにしながら、公爵を欺き、彼を嘲弄する。／欺いておいて、ナイーヴに心から公爵を恥じる。」<sup>(23)</sup>

ここに公爵の人間への接し方の根本がある。このような公爵をひとは愛さざるをえないだろう。このキリストが人間を導くとしたら、そのような人間のなかに生れる哀憐の情の覚醒によってだ。人間はどこまでも自己中心的なものだ。そのような本質を有するものに、他者への同情を呼び覚ますことは実は至難の業といえる。そのようなとき公爵は、他者と徹底的に付き合うことを通じて、他者のうちに哀憐の情をよびさますのだ。

同情は最大の力だということがこのうえなく示されたのがエバンチン家で公爵が語ったスイスでのマリイの話だ。マリイはその村で不幸な生活を送っていた女だった。年老いた母と住んでいたが、村にやってきたフランス男に誘惑され捨てられる。マリイは悲惨な状況でやつのことで家に辿り着く。しかしそれから、村人たちはマリイを罪を犯したものとして憎悪と侮蔑の目で見えるようになった。母親も自分の顔に泥を塗ったとして村人の嘲罵に娘を委ねる。誰一人として同情を寄せるものはいない。母親の病が重り、死期が近くなっても母親は彼女を許そうとはせず口もきかなかった。マリイ自身結核を病んでいたが、甲斐甲斐しく母親を看病した。しかし、母親はひと口も優しい言葉をかけることもない。マリイときたら自分は世界で一番卑しい女とみなして一切を甘受していた。村のしきたりで老女たちが母親の看病にくるようになると食べ物はいらない、完全に村からの除け者になってしまい、牛飼いを口を糊するしかない始末。母親が死ぬと村の牧師はマリイを大勢の前で侮辱し、母親の死を彼女の責任にして、彼女のぼろをまとった姿を指しながら、よい見せしめだと非難するのだった。しかも牧師のその卑劣な行為がひとびとには気に入った。しかしそこに子供たちが介入した。子供たちはその時にはすでにマリイの味方になっていた。公爵が子

供たちにマリイにたいする同情心を呼び覚ましていたからだ。公爵はそれ以前に僅かながら金を作ってマリイを訪れ、渡し、自分の行為はまったく同情の気持ちからだ、貴女は自分を卑下することはないと励まして、彼女に接吻して帰っていたことがあった。子供たちはそれを見て、公爵を嘲笑し、マリイに一層の迫害を加えた。しかし公爵は根気強く子供たちを説得し、次第に子供たちにマリイに対する同情心を呼び覚ますことに成功する。子供たちはマリイを愛するようになる。マリイを慰めるためにいろいろ工夫をするようになった。マリイは思いがけない幸福にほとんど気が狂わんばかりだった。やがてマリイは死ぬ。その棺を子供たちが担ぐというが、担げるものでもない。子供たちは棺のあとを泣きながらついて走った。しかしそのあと、村中が公爵を迫害しだしたという。

この話は極めて美しいものだが、ここには謙抑と同情の二つの重要な力の表現を見ることが出来る。公爵の同情をひいたのはマリイの無限の卑下だろう。そして子供たちの心の中に同情心を呼び覚ましたのは、マリイの苦悩にたいする公爵の誠実さだったろう。村のひとびとが全てマリイを上から断罪的に見下ろしているのに対して、公爵はまさにその苦悩を共有する。ひとびとの嘲笑も気にしない。苦悩を共有するとはそのことだ。いわば公爵はマリイと同じ平面に身を置くことによって、自己を卑下したといえる。子供たちが笑ったのもそのためだが、しかし笑ったということは子供たちがその心をひらく第一歩に他ならなかった。

このロシアのキリストは自身を人々の嘲笑のなかに差し出していわば自分を笑わせることによって人々の心を開き、真の人間的感情、真の同情を生み出すことの介護人といえる。人々は公爵を笑いながら、公爵の純真な無邪気に打たれないではおかないだろう。しかしそのような美しい人格もなぜ悲劇を避けることができなかったのか。ここに『白痴』という小説の最大の問題性があることはいうまでもない。スイスでは彼はマリイや子供たちを幸福に導いた。それがロシアではなぜ挫折したのか。ここでスイスではマリイという無限の自己卑下に碎かれた魂の持ち主と、子供たちが相手の世界だったということ进行起こそう。これらの存在間には共通したものがあつた。公爵の純粹な心情はそのままこれらの人々には通じたのだ。しかしロシアにおいて公爵の入つていった世界は遙かに強固な自我の渦巻く世界だった。そして今やその世界は金と欲望と虚榮によって人々が存在の強固な根を失っている世界だった。確固たるもの、いわば真の信仰を失つていながら、しかも自我意識において強固な人間ぐらい始末の悪いものはない。人々は真の信仰にかわるものを求める。その端的な表現がラゴージンであり、ナスターシャだったことは既に見たとおりだ。このようななかで人々が公爵によって同情の念にめざめることは困難なのだ。公爵は人々にロシア人の特性について語る。ロシアでは無神論さえもひとはひとつの信仰、ひとつの宗教にまで高めてしまう。無神論を信ずるとは形容矛盾以外のなものでもないが、それがロシア人というものであろう。

ラゴージンにせよ、ナスターシャにせよ、その情熱の徹底性、最大性においてまさしくロシア的だ。そこには強烈な自我主張があるが、個人主義的な自己保存の念は微塵もない。かれらにおいて強烈な自己主張とは、自我の絶対性の信仰に他ならない。奇妙なことだが、破滅さえも厭わない。これは考え方によれば、そのエゴイズムの徹底的欠如において神への信仰と踵を接しているものといえはしまいか。ただ、ニヒリズムによって深くひたされた時代において、いわばひとびとはアンチ・キリストに仕えることになる。公爵には二人の苦悩がよく判る。なぜなら、公爵自身時代の子だからだ。

ラゴージンは公爵に愛情と同時に憎悪をもつ。公爵を殺しかねない。にもかかわらず、公爵はラゴージン愛するのだ。かれはあるとき公爵の憐れみのほうが彼の強い情熱的な愛よりつよいといったことがある。ナスターシャにとつてみれば公爵の没我的な愛が純粹であればあるほど、惹かれるのだが、しかし皮肉なことにその愛が公爵にたいする反発力をも強めさせることになる。このことは同時にラゴージンによって自己破滅の道をよりつよく願わせることになる。公爵はこのような破滅的道を何処までも付き合うことによって悲劇を完成してゆくことになる。

問題は公爵の役割の挫折というものではないだろう。公爵がラゴージンの頭をなでながら、新しい感觸の世界にはいつていたところにある。その世界はいったいなにか。公爵には自然を前にして自分だけが除け者になっているという感觸、そして癲癇の発作の直前のあの世界が輝きわたるかのごとき感觸の世界があった。彼の前に現出した新しい世界とはそのような世界とは異なるはずのものだ。これは恐るべき虚無の感觸とでもいうべきものではないか。

虚無の感触、これもまたじつは絶対に連なる感触、公爵は「白痴」の状態に完全に戻ったというのがそれは、このような感触によって呑み込まれたということなのだ。いいかえれば公爵の魂のもっとも深層に潜在していたというべき虚無の感覚の完成というべきものだ。実は虚無はその絶対的性格において、神と相関関係にある。われわれは神なくして虚無を持ち得ないのではない。これは輝く虚無、巨大な氷層に包まれ、一切が沈黙に帰した絶対的虚無の世界、しかしその反転において神の世界に転換するとき、絶対的虚無の実現といえはしまいか。

『白痴』という小説の真の主人公は虚無だ。虚無こそ強弱の差異はあれ、その登場人物の全てを捉えているといっても過言ではあるまい。虚無の感情は自国の喪失、虚偽の横行、家庭の崩壊として現れる。そのようななかで、真実の人間、虚栄に生きる人間が振り分けられてくる。次に出てくる問題は、このロシアのキリストのひとびとのうちに呼び覚ましたものはなにかという問題であろうかと思う。

## 注

- (1) "Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie." Blaise Pascal, *Pensées* par Lion Brunschwig, Hachette p.428
- (2) "Le dernier acte est sanglant; quelque belle que soit la comédie en tout le reste: on jette enfin de la terre sur la tête; et en voilà pour jamais." Ibid p.428-429
- (3) 米川正夫訳『ドストエフスキイ全集』第八巻『白痴下・賭博者』（河出書房新社、昭和四十四年七月）三二七ページ。



- (4) 同前 一二二ページ。
- (5) 同前 一二二ページ。
- (6) 『ドストエフスキイ全集』第七卷『白痴上』四六〇ページ。
- (7) 同前 一八八ページ。
- (8) 同前 一八六ページ。
- (9) 同前 一八六ページ。
- (10) 同前 一八七ページ。
- (11) 同前 二二九ページ。
- (12) 同前 三六八ページ。
- (13) 同前 四五七ページ。
- (14) 同前 四五七ページ。
- (15) 『白痴下・賭博者』一四二ページ。
- (16) 同前 一四三ページ。
- (17) 同前 一四五ページ。
- (18) 同前 一四六ページ。
- (19) 同前 一五八ページ。
- (20) 同前 一六二ページ。
- (21) 同前 九二ページ。
- (22) 同前 二八〇ページ。
- (23) 同前 二八三―四ページ。

ドストエフスキイにおけるニヒリズムの問題(Ⅱ)(清水)